

## 哲学と政治の谷間

『鹿島開発』私が見たまま——木 本 正 次\*

日本の地域開発史上、最大のプランといわれる鹿島臨海工業地帯開発の青写真がどうやら出来上って、具体的に発足しようとした昭和 37 年 4 月 16 日のことである。この大計画の発案者であり、また実施の最高責任者でもある茨城県知事・岩上二郎氏は、いよいよ用地買収のために開発組合鹿島事務所の職員となって着任した県の職員たちに、現地のボロ事務所で、次ぎのような訓示を行っている。

「(前略) この鹿島でのこれからの仕事は、人間対人間、人間対歴史、歴史対歴史の戦いである。その意義を十分に考えて、歴史的な大事業の矛盾の中での最良の戦いを、どうかよろしく願いたい」

私は、この言葉ほどの確に、わが国の『地域開発』なるもの一般の性格を看破した言葉を知らない。言葉の前段はかなり哲学的で晦渋ではあるが、それは私がこれから述べる貧しい感想からでも、賢明な読者諸氏は容易に諒察して下さるであろう。後段の『矛盾』はいまでは周知のところと思うが、それからの鹿島開発の歩みは、いかに岩上氏が『最良の戦い』を志したにしても、また、氏がクリスチャンであり類例の少ない

ほど潔癖であるにしても、いや、そうであればあるほど、戦いは一そういいようもない『矛盾』に満ちたものとなったことの足跡を、読者諸氏は辿ってみていただきたいと思う。

この感想文は系統立ったものではなく、いわんや勿論学問的なものでもないが、『開発』という仕事の最も基本のところ、何かを考えていただくほんの小さなよすががともなれば幸いである。

鹿島開発が、これまでの日本の地域開発史になかった数多くの特性を持っていることは、周知のことである。くどく述べ立てるのは、恐縮だが、ほんの一、二に触れさせていただくと——まずその発案が政策的・行政的になされたというよりも、特異なキリスト者である岩上二郎という若い知事によって、むしろ哲学的・宗教的に着想されたという点を挙げねばならない。

鹿島半島の南部(今回の開発計画地の大部分)という地域は、『常陸国風土記』の編纂された七、八世紀の時代でさえ、まだ海であった。それが歴史時代を通じて海が打ち上げる砂が積もって形成されたもので、その砂丘地・半砂漠地に人間が住みつくようになったのは極めて新しい出来事で、海浜部の村落の歴史などはほとんど百年に満たないという、日本では極めて新しい土地であった(鹿島町の鹿島神宮をめぐる市街地などはこれと別で、古くからの陸地であり、むしろ上代の関東文化の中心地であった)。したがって、土

地は瘦せており、砂丘が連続しており、農作は極めて貧弱で、全域にかけて平均して貧しく、後進的であった。岩上氏はこの貧困を解消して、現地住民の経済解放・人間復興を成し遂げようとし、その手段として、港と工業による半島全体の開発を着想したのであった。むろん、その背景としては『時代』というものがあるのを忘れてはならないであろう。このプランが発足した昭和 35、36、37 年という頃は、日本の工業化が進み、経済が膨脹し、そのために狭い日本の国土はいよいよ狭くなり、土地利用のキャパシティーが神代以来始めてというべき革命を求められていた時代であった。土地革命の波は日本の最も新しい『領土』である鹿島半島南部をも見落すわけではなく、岩上氏が着想しなくても、いずれは誰かが拓いたろうとはいえよう。そんな点から、岩上氏が『誰か』に要請されて、『誰か』のために鹿島を開発したのだという、黒沢元鹿島町長をはじめ一部の人たちの非謗の言葉も出るのであろう。

しかし、人間の意識の形成は無数・無限といえる外部の影響の摂取から成り立つものであって、岩上氏にしても長い人生途上の数多くの見聞が、ついに鹿島開発の決意という一点に凝結したものである。現に黒沢氏自身さえ、知事に就任したばかりの岩上氏に鹿島の工業開発を陳情しているほどで、要請の有無などは問題ではなく、問題の焦点は、現実的にそれを決意したので岩上二郎という特異なキリスト者で

\* 作家、代表作として「黒部の太陽」「東京地底」「砂の十字架」など、建設に取材した諸作品がある。

本稿は、世紀の開発事業といわれる鹿島臨海工業地帯建設事業に取材して著わされた「砂の十字架」の作者の眼に、開発というものがどのように映ったか、ということを中心として、特に依頼して寄稿を得た開発随想である。

あったことに帰するといえよう。

鹿島工業開発の特異性は、すべてその一点から出発している。岩上氏にとっては、目的は港や工業地帯の建設それ自体ではなくて、それらはすべて手段であって、港と工業団地を挺子にして、現地住民の経済解放・人間復興をはかるといふことであつた。開発計画地は千何百万坪という驚くべき広大なもので——それは東京の武蔵野市とか立川市とかいった衛星都市の三市分ほどの広さだが——その用地の買収に、岩上氏は前述の根本精神から出発して、権力や法律は一切用いない、すべては現地住民の賛同の上に立って、『話し合い』でやると方針を決めた。

また、工業用地のために農地を買ってしまうのではなくて——つまり、農民から土地は全部取り上げて代わりに札束を与えるという、世間

普通の方法を取るのではなくて、開発該当区域の全地主からすべて所有地の4割を有償で提供してもらい、6割は残す。その土地が港や工団になるために移転する者には、他の区域で6割を返すという極めてめんどろな方法を取った。その『6割』は、もとはといえば水も肥料も素通しにする、農地としては最も劣悪な砂地であつたのに対して、今度は常陸川の沃土やなんかを入れて改良した肥沃な土地を返そうと意図したのであつた。しかもビニール敷きの水田とか、ビニールハウスが付き、スプリンクラーの付いた農園とかいった、極めて近代的な農業地としてであつた。それによって土地の4割の減歩は、収穫においては以前の何割も、場合によっては何十割もの増加となることが計算された。いわゆる『農工両全』の施策であつた。

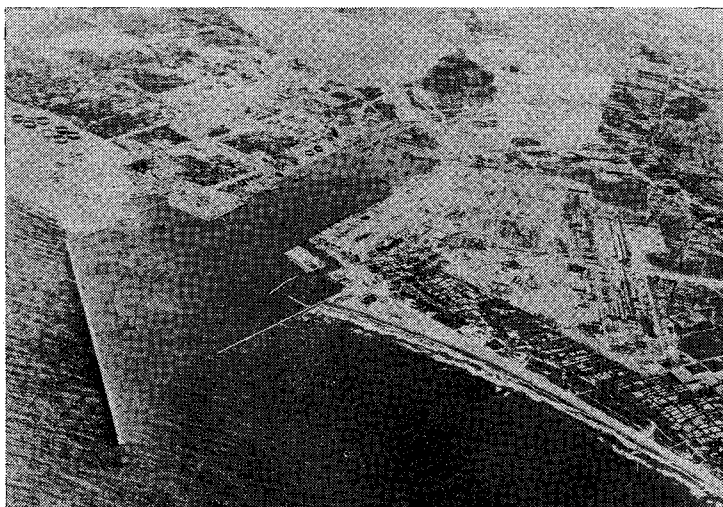
このようにして、鹿島開発はまるで神代の昔、ヤオヨロズの神々が安の河原に集まって、国引きの相談をされるような神話的な姿勢で出発したといえる。

「何回でも、何十回でも話し合うのだ。百回以内の話し合いは、話し合いの中にはいらないと思つてほしい。裸で話し合えば、誰だって結局はわかってくれるのだ」

岩上氏は、くり返し部下にそういった。『歴史的大事業の矛盾の中で』と。観念的にはやがて生起するいろんな理念や利害の相剋を的確に予言しながら、しかも氏は、自身でもかつて郷里の町で町長をしていて、小さな政治でもそれにまつわる汚なさを十分知っておりながら、しかも岩上氏は、結局は孟子の如く性善論者だったのであろう。

けれども、現実の開発は、神話のように展開してくれなかつたともいえるし、また結局はそのように展開したのではないか、ともいえる複雑な経過をたどつた。

人間の性は本来善であるけれども、物欲がその善を蔽つて、現象としての悪が現われる——と孟子は説いているが、鹿島の現実には、まさにその通りであつたといえよう。不毛といわれた砂丘地帯の畑地は、開発の初期までは坪百円でも容易に買ひ手がなかつたといわれる。それを県は、五、六百円から千円ほどで買ったのだが、そのうち開発をあてこんだ不動産屋が続々やつて来て、県の先手を取つてより高い値段で買ひあさり出した。地価は暴騰した。



<写真・運輸省第二港湾建設局提供>

.....

県が開発に乗り出したればこそ、地価もあがり、これまでは出稼ぎよりほかに用のなかった男たちにもやがては仕事も生まれて来て、落ち着いて郷里で働くことも出来るようになるわけだが、現実により分厚い札束の前には、理論も人情も屁もなかった。土地は専らブローカーの手に流れ、岩上氏の理念は一時は宙をさまよって、開発職員たちは開店休業であった。

しかし、『県』というような巨大な組織が、しかも権力を握っている強大な機構が、——そのうえバックには港をつくっている運輸省とか、進出企業の後ろにいる通産省とか、また建設省とか大蔵省とか、すでに国家機構も一体となっていることだし——そのまま指をくわえて引込むわけがなかった。

知事の『神聖な』理想は、『行政』はどんな手段を講じてでも実現させねばならないのであった。それが行政の『正義』であった。岩上氏が慧敏にも予言した『矛盾』は、こうして牙をむいて躍り出て来た。それは開く側、開かれる側、二つの側面に黒い影をくっきりと映した。

開く側から唱えられた言葉の一つは、『民間 デベロッパーの活用』であった。入り込んでいる不動産屋から、彼らも鹿島で土地を持つ以上は鹿島の地主であると見なして、その入手土地の4割ないし5割を一般地主から買上げると同額の安い一定の価格で買い上げるといふ、鬼殺しの逆手が取られた。明らかに業者たちにとっては出血価格なので、彼ら

は残る6割で勝負するよりほかにない。いずれは叩けば埃の出る連中が多いので、権力機構である県には究極的には抵抗出来なかつただろう。叩くも行政、叩かぬもまた行政——の谷間で、地価が一そう暴騰したのは見易い道理であろう。

この間、『開かれる側』はどうだったかという、温順で零細な一般住民たちの多くは県の職員たちの熱心な説得に納得して、次第に県に土地を譲っていった。県や国のすることには何が何でも難くせつけないと承知出来ない一部の評論家などは、この間の県の職員の活動を、権力を笠に着た一種の脅迫だといひ、また白紙に判を押させて後から何の書類にでも化けさせたりする詐欺行為だったといったりするが、いかにも千何百万坪という広大な土地を入手する無数の話し合いのあいだには、そのようなこともあつただろう。しかしそんな手段だけで、この広い土地の何パーセントでもが入手出来たとは考えられないだろう。

それよりも県の連中を泣かせ、大きな矛盾に追い込んだのは、一部の、大、中地主たちの限りない私欲であつたといえよう。その一人の、歴史に残る(?)名セリフが伝えられている。

「鹿島神宮の前では、50センチほどの松の植木を1本500円ほどで売っている。俺の土地にはあんな木は何万本もはえている。それを同じ値段で買え」

「土地はアメリカまで続いている。その砂利代として8億円払え」

彼らは、進出企業も金儲けのためなら、自分たちも金儲けに事業をやっているのだ。同じではないか。だから工業地帯の中で俺自身に製造業をやらせるとも主張した。なかなか筋の通った理屈である。ただし、彼らの小さな事業では、開発それ自体が目的とする、地域全体をよみがえらせるような大きな挺子には、絶対になり得ないという基本的な違いがあつた。

なぜそのような難題で、開発がもめ抜き、停滞し続けたのか? それは彼らのそのような『私権』の主張は、日本の法律では一般的に守られるべきものであつたからのようである。やがて進出企業の一部の工場が建ち、操業に入り、県は県で公害防除のために工場排水の大規模な共同処理場を完成させたりしたけれど、これら一部の大、中地主が排水パイプのルートである土地を握り締めて離さぬために、排水は処理場に達しなかった。汚水は一時、鹿島の原野や沼に垂れ流され、知られざる公害が広がった。同時に臨海鉄道のルートも製品搬出用の道路のルートもずたずたで、危険な半製品がガタビシ道をトラックで運ばれた。鹿島のコンビナートの煙突は、他のコンビナートよりはずっと大きな炎を吐いていて、それは『資源』のいっそう危険な、運び得ない部分を空に向かって焼き捨てているからだなどと、真偽は不詳だが噂された。

これらの諸現象は、いくつかの重要な意味を含んでいるだろう。その

一つは、現在の日本の支配政党やその構成員である政治家たちは『政治献金』という名の合法的なあるものを媒体として、独占大企業の利益を守るためにのみ存在しているようなもので、その私的な利益のために、たぐい稀な『私権』を許している。その同じ法律が、これらの地主たちにも（彼らは政治献金してくれないけれど）いやいやながらも、適用されるほかないということ。

また一つは、これまでの国家による地域開発というものは、一般に口コミで伝えられ、そして国民に、無責任だけれども広く信じられているところによると（明確な証拠は何もないけれど）、事前に実力政治家によって或る種の筋に情報が流され、土地が事前に買いあされ、そして計画の実施によって途方もない値上がりし、その悪銭が政府や支配政党の首脳部や直接関係者たちに『政治献金』その他合法、非合法のあるものとして分配される、というのである。そのためには、土地の値段は野放しでなければならないし、その土地を自由に売買する『神聖な』私権は、法によって守られねばならない——といわれる。

——こうして、県の職員たちは大、中地主たちの私権に振り回され、岩上氏の純粋な念願である『話し合い』の座は、彼らのごてるがままに、彼らのごてを許す錬金の罫壺となるの余儀なきに至った。一般の農民たちにはまだ6割の土地を返し切れなくて（というよりは、彼らもまた、欲と二人連れで『売れる土

地』ばかりよこせとというので、割当てがつかない点が大きいのだが）、八十万坪もの大量の土地が『念書』のかたちで県の借りになっているというのに、ごてる大、中地主には銀座4丁目ともいうべき一等地が逸早く大量に返され、しかも『覚え書き』や何かのかたちで彼らの事業の特別の応援までも約束させられているという。

そうして——さらにごてる者に対しては、最後にはやはり土地収用法の適用しか道はなかった。哲学は行政の谷間でふらふらになって、ついに権力の救援を乞うに至るのである。

にもかかわらず、極めて大局的に眺めて、鹿島開発は政治よりも前に哲学があったために、道を誤まらず——農民は6割の土地を残されているので流民とならず、大規模な・政治的な黒い霧の発生が伝えられず、考えられる範囲で、現代における最善とはいえなくてもベターな開発であった、と私は考えている。

現代の日本の社会体制内において『開発』とは『矛盾』そのものであり、人と人との対話、歴史と歴史の対話とは、こんなにも困難なものであった。では可能な限りベストに近づくためには、どうすべきだろうか？ 私はその一つの手立てとしては、単に『歴史』との縦の対話ばかりでなく、広く『世界』との横の対話が必要であろうと思う。

中共やソ連は別世界としても、アメリカやヨーロッパの一流国では、工業開発や都市の再開発には、すべ

て事前に該当地域のすべてに広く先買権の網がかぶせられている。公益は私益に優先して、ごて得は許されない。また特殊な企業や特定の政治家の汚れた私利などは、もとより介入できない。

鹿島はよくやったものだと思うのだが、日本の社会のすべてを毒している『政治資金』という不潔な化け物が退治されて、政治姿勢がすっきりし、法的にも整備されていかな限り、日本ではこれ以上に『矛盾』のない地域開発などは望まれないと思う。そんな大掃除が達成されたあとで、岩上流の哲学とキメ細かな住民への配慮が先行し、法と行政がその後を整理していく開発がなされたら——などと考えるのは妄想に過ぎないだろうか。（原文のまま）

編集部注：座談会・鹿島港開港を語る、土木学会誌 55 巻 3 号、pp 28~33 参照。

——〈特集・開発と保護／終〉——